

沖

3
2019

俳句雑誌[おき]



猛り独楽

能村 研三

空襲忌

三月十日は東京空襲忌である。私が生まれる前のことなので、現実体験はないものの、忌わしい日のことをよく父母からも聞かされた。俳句ではどんな句が詠まれているか調べてみた。

遺されし者に東京空襲忌

山崎ひさを

大川に春日あふるる空襲忌

館岡 沙織

山深く凍らぬ水は勁く湧く
よく回る手垢びかりの猛り独楽

ひと雨もふた雨も欲し松納

寒行の胸突き八丁荒び声

私の母の実家は東京の本所菊川町にあって、この三月十日の空襲で家が完全に焼失し、家にいた祖父と母の妹が亡くなってしまった。祖母はこの時市川に来ていたので命が助かり、私が中学生になるまで一緒に暮らすことができた。この日のことを当時四歳であった姉は、市川から西の方の空を焦がすほどの火が見えたと話していたことがある。

ところで、最近「祈りの日」というのが三月二十七日であることを知った。三月十一日の東日本大震災と続くのでこの月に制定されたのかと思っていたら、制定の理由を知っていささか残念な思いになった。

奈良時代の歴史書『日本書紀』に

新聞に切り抜き穴や春を待つ
後すざる箒目出口寒明くる
佇みて古色帯びたる梅月夜
空席はやはり来ぬなり春寒し
煮凝の震へるままを口にせる
夜のうちの雨水仙の立ち揃ふ

記載された詔に「諸国の家ごとに佛舎を作り、即ち佛像と經とを置いて礼拝供養せよ」とあり、その日が當時の暦で三月に二十七日であったことにちなんでこの日になったようだが、宗教用具の組合が宗教用具を通じて「祈り」の文化を幅広い世代に広め、身近な人の日々の幸せや、遠くで暮らす大切な人の無事を祈ることとで、心の平穏と思いやりの心を育むことが目的であるようだ。

私の家には能村家と家内の実家の二つ仏壇に加えて母の実家の御位牌が安置されていて、毎日祈りを捧げている。

私は毎日の通勤は地下鉄の新宿線を利用してはいるが、途中に「菊川」という駅があり、ここを通る度に震災に遭った祖父たちのことが頭によぎる。

寒木瓜

森岡 正作

地吹雪に脚より貌の踏ん張れり
法螺貝の吹き残したる虎落笛
野晒しのものに風棲み冬ざる
蝶一頭柱時計の上凍つ
門の開かずの門に蝶凍つる
寒木瓜の落暉に色を尽くしけり
修司なき世に外套の襟立てて

春の雪

二月、暦の上では春であるが、雪国ではこれからが雪の本番である。雪国にとっては、四月であれ五月であれ、雪が消えて初めて春の到来なのである。それゆえ雪国育ちの私には、「春の雪」という言葉も季語もなかったのであり、「春の雪」と言えば、二・二六事件の劇的な映像とか、三島由紀夫の小説の題名から受ける、一種の甘美な雰囲気を感じるものであった。

登四郎先生に「春の雪」を詠んだ句は、と思い『能村登四郎全句集』を調べた。上五の句は「春の雪」に降らせ籠りある」の一句で、あとは「積るより濡らして終る春の雪」を見つけた。虚の句、実の句と簡単に言えることではないが、どちらにも納得させられる。一句、これはという「春の雪」の句を自分も作りたいと思う。

能村登四郎の軌跡〔7〕

能村 研三

敵手と食ふ血の厚肉と黒葡萄

『定本枯野の沖』昭36

登四郎は自分の闘志を燃やすため必ずライバルを作っていた。これは負けず嫌いの江戸っ子気質によるもので、自らを奮い立たせるための方策でもあった。尤も矛先を向けられた相手方はそのような意識はしていなかったかも知れないが。この年、これまでの借家住まいからマイホームを新築し移り住んだこと、さらに勤め先の学校でも責任ある立場になったことも心境の変化につながったように思える。同じ年に俳人協会が設立され登四郎も現代俳句協会を脱会し会員として参加している。

身ほとりに母ある甘さ露月夜

『定本野の沖』昭38

我が家族と同居していた義母は長く寝たきりであった。実母を若い頃に亡くしているせいも、義母を大切にしていた。登四郎とは同じ江戸っ子同士であったので馬が合い、長唄や歌舞伎が好きでラジオからは常にその番組が流れていた。祖母は本所菊川町に家があったが、三月十日の東京大空襲により祖父と母の妹が亡くなり、それ以来私の家で暮らした。登四郎は「義母」という言葉を使っていない。それが義理であっても、母は母であるというのが登四郎の考えであった。



火の国の火の山の今炎天時

『定本枯野の沖』昭39

自ら「冬の時代」と呼んだこの頃、俳句の不調のトンネルを抜け出すために多忙を極める教員生活の寸暇を惜しんで三週間にも及ぶ九州への一人旅に出かけた。十年前に飛騨白川郷や八郎潟などを訪ねてルポルタージュ的な取材とは異にした旅であった。長崎、天草、熊本、鹿児島、大分などを、それぞれの地にいる「馬酔木」の句友に案内を頼み旅を続けた。この時鹿児島を案内してくれたのが福永耕二で、これをきっかけとして耕二は上京することになる。南国の風土は登四郎にとつて新たな作風を喚起する旅でもあった。

シャワー浴び真あたらしさの天を負ふ

『定本枯野の沖』昭40

登四郎は学校の臨海学校の合宿にも引率としてよく赴いた。若い頃から水泳は自信があったようで、その泳ぎ方も今の時代のクロールや平泳ぎといったものでなく「押し」が主な泳法であった。海水浴の後に海辺の葭篋張りの簡易なシャワーで豊かな水を浴びると肌の潮の香が洗われた。体を拭い外に出るとそこには新しい天地が待っていた。さっぱりと蘇って人間再生のような新たな気持になって真っ青な空を仰いだ。長かった「冬の時代」から抜け出すような明るく前向きな句である。

蒼茫集



樹頭の宝珠

水上陽三

冬 眠

宮内とし子

瓦斯の世となりて久しき山眠る

枯いてふ歩様に欲しき推進力

* 朴枯れて樹頭枝頭の宝珠かな

裸木に止まりし鳥の目に射らる

忘年多摩支部の暗き灯燥ぐ九人衆

年の湯や昭和平成生き通す

蒼 白 辻美奈子

* 凍滝にある蒼白のころざし

駅伝の道は走者を待ちて凍つ

北風けもの気高き尾を持ちぬ

霜の夜電子ピアノの音を消し

あやとりの倒れやすくて薬指

春隣さざなみは川さかのぼる

* 冬眠や生あるものに地のぬくみ

干蒲団両手いつぱい裏返す

剥製の熊の目ひかる枯野宿

呉服屋を畳みし主革ジャンパー

語部の一瞬怖し楳明り

山の星探すマフラー二重巻

吹雪道 小野寿子

真実は吹雪の奥にありさうな

猛吹雪三尺向かうは闇のしろ

さよならの人もう見えぬ吹雪なか

先見えざうしろも見えぬ吹雪道

* 後ろより吹雪亡者の来るやうな

吹雪なか生まれし赤子の声大き

抽斗 高木嘉久

チャージ機の札呑む速さ年詰まる
声交はず夜番と残業帰りかな
予告延々煤逃げの映画館
* 抽斗を開ければ小さき寒気団
寒星やむかし毎日オリオンズ
寒三日月塾終へし子に追ひ越され

枯る 内山照久

* 枯るるとは軽くなること自在かな
煌々と威を張る凍星の孤独
寒晴や女性車掌の指呼の声
枝ぶりを空に描かむ松手入
雄岳と雌岳離ればなれに山眠る
弱気吹き飛ばすポイントセア真つ赤

伝言板 栗原公子

冬晴やこの淋しさの何処より
* 雪降り来むかし駅舎に伝言板
冬紅葉いのちの色を尽しをり
侘助や秘密といふは漏れやすく
検査着の裾のぼりくる寒さかな
千年の古都だき四方の山眠る

畳 岡部玄治

縄飛びのこぼれむばかり黒まなこ
山ふたつほどよく離れ冬あたたか
あをあをと畳のにはふ鏡餅
* なまはげの息より白きものはなし
インフルエンザ夢にあまたの星の艶
息かけて手鏡覚ます雪をんな

潮鳴集



半裸

井原美鳥

たまゆら

栗坪和子

* 充電完了福寿草がひらく
眠る山日を食ふ月を渡しをり
眼剥く仁王半裸や雪催
雪暗や荘と灯れる庫裏に用
雪に雪ねむりつ越ゆる駅いくつ

緑のラベル

齊藤 實

翡翠の瑠璃の際立つ寒さかな
* タバスコの緑のラベル聖夜来る
地吹雪に黒の恍惚貨車続く
朝刊の古紙の色する初日かな
角樽の鬼気のためてたきお正月

* 淑気満つ鳩くぐる間のたまゆらも
七草や水ゆたかなる安房の国
京へ入る七つの峠冬霞
雪吊に全き芸あり繩に松
海鼠食ぶ身ぬちに少し無頼の血

からりと

小林陽子

てのひらに綿虫青む御陵かな
鳶の笛ひゆると冬天曳きにけり
艦綱の芯まで凍てて鳶の笛
* とんかつのからりと春の遠からず
ふくふくと赤子福耳福寿草

飛鷹選評



能村 研三

凍つる拝殿鵜捕部 肅々鵜を放つ 道端 齊

北陸の氣多大社で十二月に行われる奇祭「鵜祭」を詠んだ句である。一昨年、道端さんのご案内で私も見る事ができ、その時の一句が今年の十月に氣多大社に句碑として建立される。一年前には七尾湾で鵜が捕獲できずに中止になってしまったが、今回は「北國新聞」に詳細に報道されたのでその様子がよくわかった。午前三時、鵜捕部（うっとりべい）が捕えた鵜の入った籠を拝殿に持ち込み放つ。鵜は瞬間に拝殿の蠟燭の灯りを吹き消し深い闇に包まれる。私が行った年は外はしんしんと雪が降っていた。字余りがある句だが、かえってその神聖な神事の臨場感が伝わってくる。

捨て場なき雪踏み固む 踏み固む 木村あさ子

都会に住む私たちには想像できない現象で、降っても降っても止むことのない雪に途方に暮れて、捨て場に雪を持っていくこともできず、仕方なくその場で雪を踏み固めるしか方法が無かった。これでは雪が完全に消えるまで、どの位の時間がかか

るだろうか。半ば諦めの気持でもあろう。雪国の厳しさがリアリティをもって描かれた句である。

がうがうと風音が年逝く音が 佐川三枝子

今回は東北の人の作品が続く。「がうがう」というオノマトペ、これは「滝がごうごうと流れる」とか「汽車が轟轟と音を立てる」といった場合に使われようだが、「風がごうごうと吹く」といった場合にもこの言葉が使われる。村上鬼城の句に「残雪やごうごうと吹く松の月」という句がある。東北の年の暮の頃は寒さも一段と厳しく雪を伴った強い風が吹きつける。

しばるるや産後の牛に寝糞足す かどうかひろこ

かどうかさんも東北青森の方。牛の出産は春先に生まれることが多いのだが、まれに寒い時期に出産することがある。作者もその場に立ち会ったのであるうか。牛床を乾燥させ、牛小屋に寒風が入らないような防寒対策を施し、少しでも温かくなるよう敷藁を敷き詰めた。

父母の墓見えてゐる日向ぼこ 根本 世津

根本さんは先ほどの佐川さんと同じ福島の方。この句も都会では考えられない光景。田舎だと自分の敷地内に先祖のお墓があるところがある。この句日向ぼこをしているのがどこなのか、自分の家の縁側から見える位置にあるのか、それとも墓の近くのどこかで日向ぼこをしているのか、いろいろ考えられる。

〈以下略〉

沖作品



能村研三選

神門の冴ゆる檜皮や神鶉待つ

富山

道端 齊

* 凍つる拜殿鶉捕部肅々鶉を放つ

首伸ばし荒鶉に還る冬の浜

還俗の鶉の戸惑へば冬の濤

天狼や荒鶉の目指す能生の海

雪のんの身辺り小さく小さく生く

青森

木村あさ子

* 捨て場なき雪踏み固む踏み固む

積もる雪積もらぬ雪や風の町

雪掻きの家それぞれにある流儀

無人駅の雪庇深ぶか五能線

街師走半月空に煌とあり

目瞑りて陽を貧るや冬の蜂

福島

佐川三枝子

* がうがうと風音が年逝く音が

祝はれてただ面映ゆし米の春

去るものを去らしめ妻の寝正月

子が舞へば父いきいきと神楽笛

青森

くどうひろこ

* しばるるや産後の牛に寝藁足す

金色堂の浄土に見ゆお正月

四日はや仏師のはじく鑿の屑

雪明り堂にあまたのおしら様

初雪や雀一羽も来ずなりて

福島

根本 世津

* 父母の墓見えてゐる日向ぼこ

臘梅に風の一となりにけり

胃カメラと太字で書きぬ新暦

掌に赤子を浮かせ初湯かな

狐火を追はば十九の兄ゐるか

暁の微光に震ふ初氷

千葉

村上 葉子

* 煩惱のひとつ脱けたり大噓

産土に降りつむ落葉踏みしめり

飛ぶ鳥の影走りゆく冬の畑